対談

キャリア教育 その10年間の変遷、そして展望

学校現場で「キャリア教育」が共通の取り組みとして行われるようになっておよそ10年が経った。キャリア教育はなぜ求められ、そしてどのように広まっていったのか。その変遷と課題及び今後の展望を、キャリア教育の研究・推進に長くかかわってきた和歌山県立桐蔭中学・高校の宮下和己（かつみ）校長に聞いた。

10年間を掛けてキャリア教育は整備された

宮下　「キャリア教育」に関する議論が始まったのは、今からちょうど10年前のことです。2003年4月、私は文部科学省国立教育政策研究所の生徒指導研究センター（当時）の総括研究官として着任し、前年から文部科学省でスタートしていた「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」に参加しました。ここで、学校におけるキャリア教育に関する議論が始まり、04年の1月には報告書を発表しました。キャリア教育について研究・開発を行ってきた私たちにとっては、まさにこの年は「キャリア教育元年」と言えます。

木村　およそ10年前から高校現場において「キャリア教育」という言葉が使われるようになったわけですが、それまで既に学校現場で広く使われていた「進路指導」とは、どのような違いを持って受け止められたのでしょうか。

宮下　進路指導の本質を理解していた教師にとっては、きっとキャリア教育も進路指導も言葉の違いでしかなかったでしょう。しかし当時、進路指導をいわゆる出口の「就職・進学指導」という小さな枠で捉えている教師もいました。そうした考えを大きく転換し、小中高を通じて改革を進めるために、キャリア教育が求められた側面もあると思います。

木村　当時は、日本の雇用環境が悪化し、ニートやフリーターの増加といった若者の課題も注目されていました。キャリア教育は、次代の日本を支える若者たちをどう育てるかという大きなテーマに向き合うものだったわけですね。

宮下　そうです。ただ当時、キャリア教育は「端的には、『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育』」と捉えられていました。しかし、これはキャリア教育の半分の面しか説明していません。キャリア教育には、勤労観・職業観の育成だけでなく、社会で生きていくための資

図1　キャリア教育の定義

◎キャリア教育

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

＊キャリア発達…社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程

◎職業教育

一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育

出典／中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」2011年1月31日

質や能力の育成も含まれます。この定義が書かれた04年刊行の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」でも、「キャリア教育」は、「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』ととらえ、端的には、『児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育』」とされていました。しかし、「端的には」の部分だけが注目されてしまったのです。

和歌山県立桐蔭中学・高校校長
宮下和己 みやした・かつみ
教職歴35年。和歌山県立箕島高校、向陽高校、和歌山県教育委員会を経て文部科学省へ。国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官、児童生徒課生徒指導調査官などを務める。その後、和歌山県教育委員会などを経て、2012年度より現職。

その後もキャリア教育をどう定義するか、さまざまな場で議論が続きました。そして11年、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素を明確化しました（図1・2）。つまり、キャリア教育はおよそ10年を掛けて今の形に整理されてきたわけです。

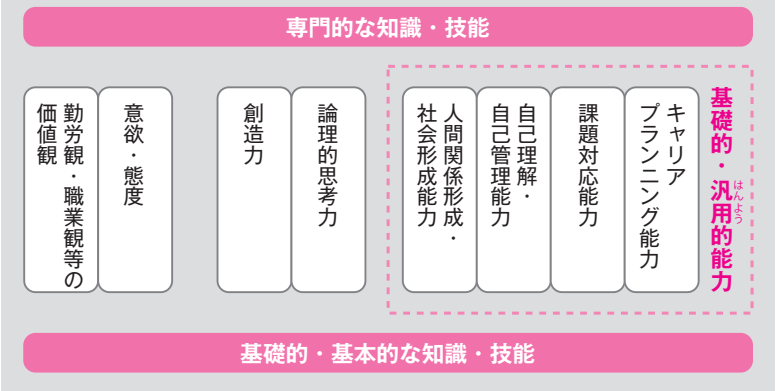
教科指導を含めた広い領域で展開すべき

ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室
室長
木村治生 きむら・はるお

木村 キャリア教育は、勤労観・職業観を育成することにとどまらず、人生で直面するさまざまな選択の場面で必要な意欲・態度、論理的思考力や創造力、課題対応能力をも身に付けようとするものだとすれば、これは、変化が激しいこれからの社会を生きる上で必要とされる「21世紀型能力」にも通じるものだと思います。「21世紀型能力」には、基礎的な知識・技能を実生活に生かして、自律的に社会に参画していくような力が含まれます。PISA2012の結果では、そのような力のベースになる学習への興味や有用感について肯定的に答える子どもの比率が低い状況でした（P.8図3）。「学びが将来にどうつながっているか」がはっきりと見えないことが、学びに対する意欲や態度に影響を与えている気がします。

宮下 本来、キャリア教育に求められたことの1つは、子どもたちの学びへの意欲を高めることです。04年の報告書でも、学びが将来社会の中で自立して生きていくために必要であることを子どもたちに伝える重要性について言及しています。「学ぶこと、働くこと、生きること」を考えるのがキャリア教育だと私たちは考えたのです。しかし、学ぶことが自分の人生をどう切り拓くのか、生

図2 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素



出典／中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」2011年1月31日

徒がイメージするのは簡単ではありません。

木村　中学、高校と成長するにしたがって、自分の存在の意味を問いながら「なぜ、こんな勉強をしているのか」と考え、悩むものです。先生方が、人生という文脈の中で学びの意味を語ることも必要でしょう。

宮下　諸外国の教科書には、冒頭で「この教科を学ぶことがどんな仕事につながり、将来どんな役に立つのか」を説明しているものがあります。日本でも、授業中に教師が説明することはありますが、教育活動の中で必ず行うものとはなっていません。しかし、今回の学習指導要領改訂では、中学校理科において、指導について配慮する事項として、「理科で学習することが様々な職業などと関係していることにも触れること」と明記されました。キャリア教育の観点ではこれは画期的なことですし、本来、高校を含めて、全ての教科で同様に記されるべきだと思います。

木村　進学指導に力を入れる高校ほど、授業の中で生徒が学ぶ意味を考え、生き方につなげられる指導が求められるのではないでしょうか。

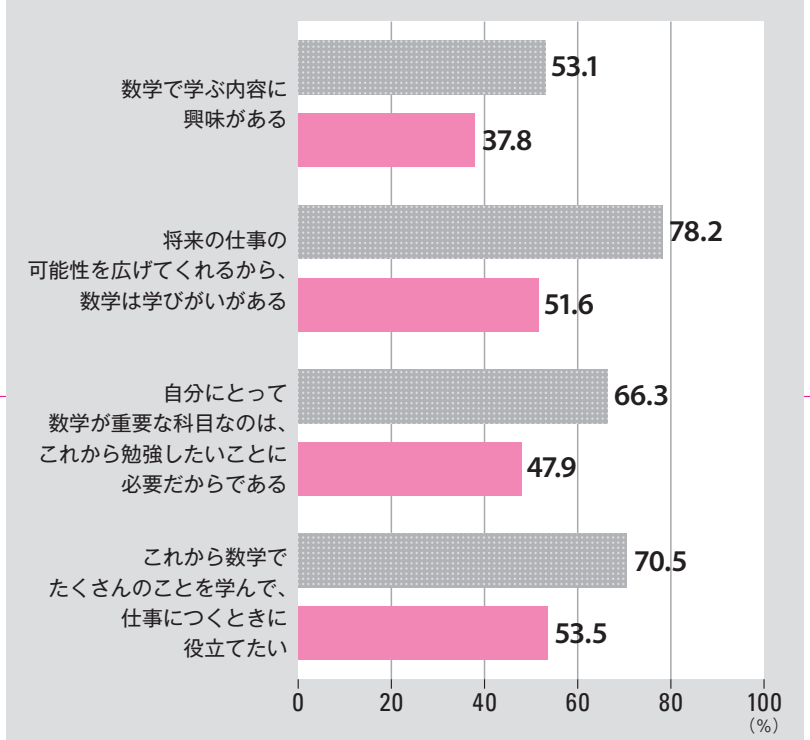
宮下　教科指導の中でもキャリア教育を推し進めることが、これからはますます重要になると思います。本校は今年度より、文部科学省からキャリア教育をテーマにした研究開発学校の指定を受けたこともあり、先生方には「桐蔭の学び」と題して、教科での学びや部活動の意義と共に、キャリアとの関係を「キャリアへの誘い」という項目で説明する文章を書いていただき、それを生徒に配布することを計画しています。学びの意味や面白さを教師が自分の言葉で語っていくことで、日々の授業も少しずつ変わっていくのではないかという気がします。

教師の豊かな人間力がキャリア教育を支える

宮下　キャリア教育の目標をひと言で言えば「社会的・職業的自立」ということになります。そして、真の自立のためには、生涯を通じて学び続ける人であることが求められます。その意味では、キャリア教育の真の成果は、すぐに確認できるものではないと言えます。ただ、成果はすぐに表れるものではないからこそ、これからの高校には、卒業生を追い掛けていくことが必要になるのではないでしょうか。例えば、大分県立日田三隈高校は、卒業生が30歳になった時、「30歳のレポート」を高校からの最終課題として提出してもらい、教育の検証に活用しています（本誌10年6月号でも紹介）。本校も研究開発学校になったのを契機に、卒業生を追跡調査していこうと考えていますが、そうした学校は今後増えてくると思います。

木村　高校在学中でも、活動の記録やそこで感じたこと、学んだことを記録するポートフォリオを活用することで、高校3年間の変化、成長を確認することが出来ますよね。

図3　数学に対する意識（PISA2012結果より）



注1）「まったくその通りだ」「その通りだ」と答えた生徒の割合

出典／文部科学省国立教育政策研究所『OECD生徒の学習到達度調査～2012年調査分析資料集～』（2013年12月）
＊2012年調査は数学的リテラシーを中心分野としているため、数学を中心に尋ねている

宮下　そう思います。そして、そうした振り返りの機会をつくることで、生徒の内面により深く定着するはずです。体験学習や講演会などの体験の場も、振り返りがなければ、活動の意味は生徒に定着しません。インターンシップの前の礼法指導も、あくまで直前の準備に過ぎません。インターンシップ参加が自校の生徒にどんな意味があるのかを教師が理解し、全ての教育活動を通じて、日々必要な指導や問い掛けを生徒に行うといった連続性・計画性を持ったものが、本来の事前指導であり、事後指導だと思います。

　また、キャリア教育の成果は、生徒の高校生活にさまざまな形で表れるものでもあると思います。学力が向上したり、進路や部活動での成果が上がったりといったことも、キャリア教育の成果を測る短期的な指標になる可能性もあるでしょう。重要なことは、多様な視点でキャリア教育の成果を検証することです。「常に学び続ける生徒」をキャリア教育で育てたいのであれば、まず私たちがキャリア教育を形骸化させぬよう、常に改善に取り組むべきでしょう。

木村　キャリア教育が社会と自分について広く考える活動である以上、大学や企業などの学外の機関との連携はますます重要になるはずです。学校が地域、更に保護者と結び付くためには、教師にも外部と連携する力が求められるように思います。

宮下　教師が総合的な人間力を備えていなければ、地域や保護者とも語り合えません。これからの時代、生徒に表現力やコミュニケーション能力が求められていますが、きっと、そうした教育を実現する立場の教師には、生徒以上にそれらの力が必要なのでしょう。本校のように地方にある高校は、キャリア教育で協力を得られる大学や企業の数は決して多くはありません。しかしその分、地域の企業や大学と綿密に議論できるため、質の高い校外学習を実施することは、教師の力があれば十分に可能です。

木村　キャリア教育そのものの歴史は10年ほどですが、この10年間で大きな枠組みができ、これから更に充実していく段階に入ること、そしてその本質は、日常の実践に多く埋め込まれているのだと改めて実感しました。言語活動の充実がそれぞれの教科の活動で実践されていくように、キャリア教育という視点で日頃の授業、部活動、クラス活動を捉え直すことが出来ると、よりそれぞれの価値が高まるように思いました。

宮下　キャリア教育は特別なイベントで構成される取り組みではありませんし、生徒に夢を描くことだけを求めるものでもありません。キャリア教育はもっと地道で、現実的な教育だと思います。私たちが育てたいのは、夢と希望を一生懸命追い掛けるけれど、失敗してもくじけず、現実の中で折り合いをつけながら生き抜いていける生徒です。これまでの実践や取り組みをキャリア教育の視点から見直し、高校生の発達の段階に見合った真のキャリア教育を追究する時代が来たのだと思います。